第 2 部パネルディスカッション

【日時】平成 27 年 1 月 24 日（土）16:10～17:15

【モデレーター（敬称略）】 花岡 英紀

【パネリスト（敬称略）】 上村 尚人、lan S Gourley、小池 恒、中神 啓徳、宮田 俊男

先生方がどのようなことを考えているのか？（16:10～）

上村尚人 先生

・産官学のコラボレーション、阪大成功事例として 2 つの事例あったがかなりたくさんの人がプロジェクトにかかわっていたのではないかと思う。

・人材は極めて重要であるのはわかりきっていることだが、日本では産官学の仕組み作りの他、キャリアパスを作ってあげること、TR やることがエキサイティングであることを教えてあげる必要がある。

・個人プレーではなく、チームスポーツであるということを lan も言っていたがその通り。

・ドラスティックに仕組みを変えていかなければならないだろうと感想を持った。

Dr. lan S Gourley

・TR のプロジェクトを成功に導くかについて。事例を 2 つ紹介する。

・1 つ目。免疫学の分野にどうやって応用したか。免疫学の専門の人に TR に専念してもらおうとした Experimental medicine 革新的な新しいデザイン、技術を考えてもらおうとした。TR medicine に専念する人たちには本当にそれに専念できるだけの環境を整えることができた。雑音に紛らわせられずに。

・2 つ目。TR の中心になりたいという人がいたが、TR medicine に入ってもらおうという話になった。社内で、興味のある人熱意のある人を引き抜くことで、5 年前は全く違う分野をやっていたにもかかわらず、TR medicine にとって重要な一員となっている。

小池 恒 先生

・自身のバックグラウンドや薬事のことを如何にして相手に伝えるか、2 年くらいしてようやく業界用語が分かるようになってきた。

・このような人材を育てていくことから始めるべきではないかと思う。

中神 啓徳 先生

・自身が教育を受けたような感じがする、チャンスがあれば人材は育つのではないか。

・これまではそういったチャンス（話等を聞くこと）がなかったが、これからはちゃんとした人が出てくるのでは？

・TR の土壌が整っていくうちに、ちょっと楽観的だが人材は育っていくのではないか。

宮田 俊男 先生

・昔は色々なことが頓挫していた。今も臨床薬理学講座一つ作るのに大変な思いをしているが、こういったことを改善するためには下記の 3 つが挙げられると思う。

流動性 色々なところにポジションを変えていくこと。色んなキャリア。

企業でも然り。開発職に MR を経験させたりしてもよいのではないのか。企業内でのキャリアパス。

マネジメント、ガバナンス　一定程度訓練を受ける必要がある、臨床研究を進めるのに何が必要か。
トップの人材育成。

キャリアパス

「ここは上手くいっています」ということはあるか？　16:40～

上村　尚人　先生

・阪大は予算が下りて人がたくさんついた。複数のプロジェクトが走っていると、いろんな人が関わってきて相乗効果が生まれるし、そこで色々な議論が生まれる。
・シーズが少ないところには、面白いプロジェクトは生まれないし、卒業した MD はよほど勇気がないと飛び込んでこない。
・産官学、バイオマーカーStudy 等の地道なところからアカデミアが関わっていくことが必要。
・まずは魅力ある研究を生み出し、若い研究者に見せることが第一。
・TR の面白味や実際の事例を若い研究者に伝えることが大事。ただ見ているだけでは Exciting には感じない。
・これをどうやって薬事承認にもっていくとかイメージが掴めると楽しめるのではないか、このような工夫をこれからしていこうと思う。

基礎のままではなくてどうやって臨床に持っていっていくか？（scientific の変換）　16:45～

Dr. Ian S Gourley

・P1 が最も Exciting である。なぜなら化合物がどのように反応していくのかも見られるし、色々な機能を持つ部署とコラボレーションできる点が魅力的。
・どのように人材を育成するのかは、TR medicine で働くことは楽しいと感じたことがきっかけ。（先ほどの事例）全員にとって win-win であったと言える。
・なぜ TR medicine が必要なのかは、創薬 PD,PK が大切、症例の代わりとなるサロゲートを探す、バイオマーカーをより理解するためには TR medicine は重要であるので、より早く進めることが大切。
・望みの薄い薬剤を開発するのを中断するのは良いこと。

中神　啓徳　先生

落とし穴は「特許」。特許に必要なデータと論文に必要なデータは同一ではないので、初期段階にこれらに精通した人がいると良い。研究者側に余裕もないといけない。特許に慣れた人に早めに相談することが大切。

どうやって人が育っていくのか？　17:00～

宮田　俊男　先生

・若い人に如何に火を点けるのかがポイント。なぜ若い学生が興味なく講義中居眠りをしているのかというと、自分に関係ないと考えているから。若いうちからしっかりとやる。
・トップマネジメント
・大学がどうやって生きていくのか。産学連携で大学側がしっかりとしたガバナンスで頑張る。

小池　恒　先生

・重要な役割を担っているということをイメージさせる。
・組織として、TR を推進するということをメッセージとして伝える。

最後に一言
・臨床薬理について
・最近はバイオマーカーを早期に見ることが増えてきたが、中々上手く回っていかない。
・お金がある場所と専門家が集まれば日本は発展していくのではないかと思った。